

シラスウナギ蓄養技術開発と 海水飼育による親ウナギ生残特性の解明

(予算区分 県単独 研究期間 平成30～32年度)

担当：深層水科 今井基文

【研究の背景とねらい】

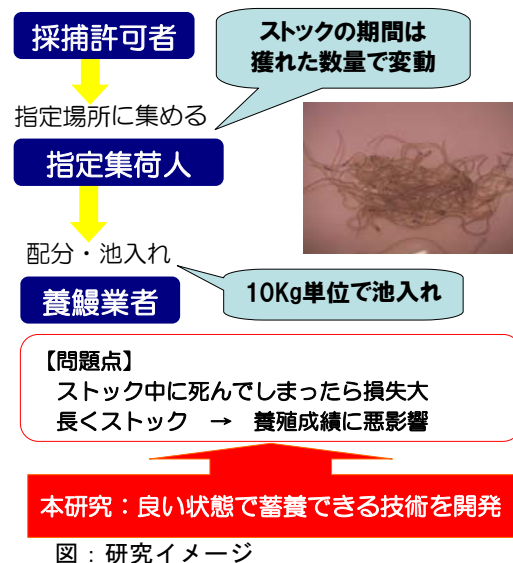
平成27年の本県の養殖ウナギの産出額は64億円で、カツオ173億円、キハダマグロ72億円に次ぐ重要魚種です。しかし、養殖種苗であるシラスウナギは100%天然資源に依存しているうえ、ニホンウナギは資源の減少から国際自然保護連合のレッドリストにおける絶滅危惧種に指定されて取引が制限されるなど、養鰻業は厳しい状況にあります。養鰻業者は10kg単位でシラスウナギを池入れしますが、近年、シラスウナギの不漁が続いており、まとまって採れる新月の大潮から次の大潮までの最長で約1か月間蓄養する場合があります。長く蓄養した種苗は、蓄養中の減耗や養殖成績が悪くなるのが問題となっています。そこで、本研究ではシラスウナギの短期蓄養技術の開発を行い、状態良く蓄養する技術を開発します。

親ウナギ保護の観点から、漁獲された親ウナギの買い上げと放流に取り組んでいます。ニホンウナギは複雑な生活史をもつため、生態については解明されていない事が多く、特に海域の親ウナギについてはほとんど分かっていません。そのため、親ウナギの効果的な放流には、漁獲から放流までの間の蓄養による影響や、放流後の生残などを明らかにする必要があります。そこで、本研究では飼育試験によりこれら課題の解決を図ります。

【期待される効果】

- シラスウナギを安全かつ確実に短期蓄養できる体制を確立することで、養殖種苗を安定して供給することが可能となり、養鰻業の安定化が期待されます。また、蓄養中やその後の育成中の減耗を軽減することで、ウナギ資源をロスなく利用することが可能となります。
- 親ウナギについては漁獲後の蓄養方法や海水中での生残等が明らかになることで、親ウナギ保護活動が活性化され、最終的には天然資源の増大につながることを期待します。さらに、長期間の海水中での飼育試験により新たな知見が得られる可能性があります。

シラスウナギ採捕（11月～翌4月）



【年次計画】

小課題名	研究年度			研究内容
	30	31	32	
1. シラスウナギ短期蓄養技術の開発	○	○	○	シラスウナギを短期間（1ヶ月間以内）蓄養するための技術開発を行う。
2. 親ウナギに関する研究	○	○	○	海水中での親ウナギの生残と、生理的・形態的な変化を飼育実験で明らかにする。

(作成 平成30年4月)